きらっと彦根

彦根の魅力★再発見

足軽組屋敷・辻番所の保存と利活用のあゆみ

辻番所・旧磯島家住宅の保存

彦根城は戦時に備えて城と城下町を囲むように城下の外堀の外側、芹川（藩政時代：善利川）の内側に足軽組(7組）1200人を配置し、それぞれに屋敷一戸を与え防御に備えていました。中でも一番大きかったのは善利組（せりぐみ）でした。現在の芹橋2丁目地区(当時390戸)で現存する足軽組屋敷は30戸まで減少していますが、その中の足軽組屋敷旧磯島家住宅とその一角に建つ見張り小屋「辻番所」が400年前の築城当時の町割りとともに現存し、町のシンボルとなっています。

平成19年(2007年)8月初旬、「辻番所・磯島家住宅」(個人所有)の売却話が浮上、建物消失の危機を感じた人々が保存のため募金活動に立ち上がったことで貴重な建物が守られ保存に至りました。

古民家トラスト活動

保存活動の先頭に立ったのが山﨑一眞氏。当時、滋賀大学教授でNPO法人彦根景観フォーラム理事長でした。平成19年10月に呼びかけ人7名により会合を実施、11月には呼びかけ人を含めて57名の発起人が集結し、12月に「彦根古民家再生トラスト」を設立し募金活動が開始されました。併せて「コモンズ活動」も展開し、ワークショップやシンポジウムを重ねて開催しました。

古民家再生トラストでは、募金活動と並行しつつ、行政に対して辻番所を「市の所有・市民の自主運営」を提案するなどの活動を続けました。その結果、①平成20年8月に彦根市が購入され　②10月、管理運営は地元のひとたちが最適とのことから「彦根辻番所の会」を設立。③「古民家再生トラスト活動」は目的達成により募金は市に寄付、組織を解散。　募金(トラスト)は、大学、NPO団体、企業、市民、芹橋住民、約350余名の方々よりの浄財を頂きました。 ※(コモンズ：管理運営を自主的に行う制度)

まちづくりへの道のり

旧彦根藩善利組足軽組屋敷の旧磯島家住宅及び辻番所の文化財保存と施設の利活用を目的に平成20年10月に「彦根辻番所の会」を発足させ、併せて「足軽辻番所サロン・芹橋生活」を開設しました。文化財施設の管理運営を地元の辻番所の会に任されたものの、「まちづくり」は素人の寄り合い所帯。しかし、辻番所の会の活動が、住民や市民の集いの場となり、「まちづくり」の拠点となることを願い、取り組んできました。

初めに取り組んだのが、各分野の専門家を招き足軽の歴史や彦根の文化、生活を学び、住民や市民も参加して語り合える場としての「辻番所サロン・芹橋生活」（講座）です。第1回の「江戸時代の足軽」の講座から初めて本年1月で第91回を数えました。第21回では、東日本大震災を受けて「防災」をテーマに集中講座と研修を重ねていた中で、自治会も巻き込んだ「まちづくり」へと展開し、①防災会再編・②三区の自治会合併・③芹橋2丁目まちづくり憲章の制定等々、地域にまちづくりの拠点が出来たことで芹橋地区における「歴史的意識」「わが町への再発見」「住民のコミュニティづくり」など、大きな変化と成果が各所で見られるようになりました。

「人がまちを創り・まちが人を育てる」いずれであっても、わが町では「辻番所」が保存され、活動拠点が出来た事で　芹橋地区は大きく変化しています。

彦根辻番所の会の活動

辻番所の会が発足して15年、辻番所・旧磯島家住宅が平成22年12月よりの解体修復工事を経て、平成26年4月より彦根市より委託管理を受けて10年になります。

現在の活動は、①委託事業(組屋敷一般公開) 観光目的に土日祝日を一般公開。公開日の当番は地元住民有志がボランティアで任に当たるなどの活動をしています。②足軽辻番所サロン「芹橋生活」・ ③文化財組屋敷の特別公開（年1回10月）・④地域コミュニティ活動として、歴史のあるまちを未来に伝え、住む人々がお互いに助け合いの精神で絆を育て、子供からお年寄りまでが安心して暮らせるまちづくりの構築を自治会と連携しながら目指しています。

（彦根辻番所の会　会長　渡邊弘俊）

復活した茅葺き屋根

多賀町栗栖で、茅葺き屋根の葺き替えが行われました。栗栖から河内へ向かう道沿いに建つ旧西村商店さんです。

およそ100年前に多賀町の杉という集落から移築されたと言われ、当時は食料品や日用品を扱う商店として、地元の人や山里を行き来する人々で賑わいました。20年ほど前から使われなくなり屋根の傷みが激しくなってきました。令和3年から彦根景観フォーラムもかかわりながら何度か差し茅などの部分的な屋根修理を行ってきましたが、この度建物の構造を含む本格的な修理を行うことになり、先行して屋根の葺き替えが完了しました。

建築工事は鈴木古建築さんが担当され、茅葺き工事は、「かや葺きの里」として有名な京都・美山町で修行された茅葺き職人 大野沙織さんが担当されました。

修理前の茅葺き屋根は湖北の職人が手掛けたと言われ、湖北独特の手法が用いられています。妻側の棟の下の部分に「かご打ち」と呼ばれる竹を編んだかご状のもので茅を押さえています。これは、雨で傷みやすい部分を保護するためと言われています。しかし、現在湖北ではこの手法を用いた茅葺き屋根は確認されておらず、この近辺では多賀大社門前の糸切り餅店 莚寿堂さんに残っているのみです。今回の工事では、その「かご打ち」が大野さんの手で復元されました。珍しい手法なので、近くを通られたら是非ご覧ください。

また、「時習館」という地元の寺子屋に植えられていた梅の老木が建物の庭に移植されました。うまく根付くか心配されましたが、この春も、みごとに花を咲かせました。

これから建物本体の工事が行われていきますが、完成すると地域の魅力がさらに高まることと思います。

（彦根景観フォーラム　笠原啓史）

復元された「かご打ち」

莚寿堂さんの「かご打ち」

花を咲かせた「時習館」の梅の老木

さとの宿だより　「一圓杢太夫家文書目録」から

一圓屋敷を興した一圓杢太夫家は、江戸時代のはじめに一円村に住みはじめ、以後400年、12代まで続きました。一圓家に残されていた史料は、滋賀大学経済学部附属史料館により整理されて、2023年3月に「一圓杢太夫家文書目録」（『研究紀要』第56号）として刊行されました。

「一圓杢太夫家文書目録」によると、一圓杢太夫家に伝来した江戸期から昭和期までの文書は2416点。一圓家がどのように土地を取得し大きくなっていったかがわかる史料がまとまって伝わるほか、一円村は彦根藩領であったため、彦根藩からの御触書や通達書など、支配に関わる文書が含まれています。また、地域の有力者となってからは、寺や神社に寄付をしたり、火災・地震といった災害の時には、学校、警察、各種団体へ寄付していたことがわかる領収証や感謝状もたくさん残っています。

一圓杢太夫家は、地域のなかで長年にわたり貢献していた一面が伺えます。

1704年と1763年には、鎌倉期から続く多賀大社の最も重要な儀式、古例大祭（多賀まつり）の主役である馬頭人にもなっていて、まちのスターを輩出した家だったこともわかります。

今年もまた古例大祭の季節がやって来ます。春らんまんのなか、黄緑色の田んぼをゆく長い行列の中に、馬にまたがる一圓杢太夫さんが居たことを誇りに思います。

（多賀さとの宿一圓屋敷マネージャー　江竜美子）

多賀さとの宿 一圓屋敷

https://www.ichienyashiki.jp/
〒522-0317 滋賀県犬上郡多賀町一円149
Tel. 050-3319-1050　info@ichienyashiki.jp

編集・発行：NPO法人彦根景観フォーラム
〒522-0075　滋賀県彦根市佐和町3番４号
hikonekeikan@hotmail.com
http://hikone-keikan.seesaa.net/